



筑紫女学園大学リポジット

Viewpoint on Short Short Stories in Modern Chinese Literature

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/259

中国現代文学における「微型小説」への視角

石 其 琳

Viewpoint on Short Short Stories in Modern Chinese Literature

Kilin SEKI

はじめに

「微型小説」に対して、私が注目し始めたのは、約10年前の「世界華文微型小説大成」（1992年上海文芸出版社）という小説集を読んだのがきっかけである。当然それまでに、微型小説のような創作分野に属する「小小説」、「一分間小説」、「極短篇」などの名称で、中国各地域において新聞、雑誌で発表された作品の多くを目にし、興味を持ったのだが、当時現代文学の範囲から、このような創作分野に対し、作品数は多くても、その文体、創作方式に対して認識を高め、またその文学的価値を明確に定めることは、現実的にまだ十分に育まれた時間と空間がないため、研究対象になることはなかった。しかし、その後中国社会に変化がみられ、国の政策の転換から、社会生活が経済発展によって、大きく変貌する中、文学の創作分野においても多様性へと向かう傾向が顕著に現れ、「微型小説」の成長が目白押しに進み、かなりの成果があったのは事実である。

今日の社会において、微型小説のような創作分野は、定着されつつあることは否定できないが、現代文学の一ジャンルとして定めることは、やはりさまざまな問題を生じさせるのも事実である。本論は、「微型小説」の発展実態を明らかにし、現代文学の一ジャンルとして、その問題点を探求し、中国現代文学における重要な位置付けと役割を考察してみたい。

一. 中国における「微型小説」の成立について

本論の問題点を探求するため、まず中国における「微型小説」の創作ジャンルが社会において、その成り行きの実態を理解する必要がある。そして「微型小説」と言う創作様式の由来及びその文体の形成状況も明らかにしなければならないと考えられる。この章に於いて、まず以上述べた内容について、考察してみたい。

(1) 「微型小説」の意味について

「微型小説」とは、文字通り、「小説」のひとつのスタイルであることは相違ないと考えられる。また一般的に、小説として考えた場合、その創作法または文体に、独自の様式と創作条件があることによって、一般の小説において、特別な枠として、みなすべきであろう。

実際ここで論ずる「微型小説」というジャンルは、中国現代文学独特なものではない。更に中国においても、その創作方式に対しての名づけ方について、上述にも触れたように、いくつかの名称がこの（ジャンルの）文学の派生する地域によって、異なった名称が併用されており、まだ統一されていないのが現状である。そしてその創作ジャンルの定義に対して、これまで多くの説があり、いまだに定まった範囲がないのも事実である。

そもそも「微型小説」の創作スタイルは何を基準に考案されたのかをこれまでの研究説に基づいて、説明を加えたい。現在の中国社会において、「現代文学」の一ジャンルとして「微型小説」を見た場合、その発想のもとになる概念は、アメリカ North Carolina 大學教授 C. Hugh Holman の著作「A Handbook to Literature」(1972)にある解説によるものとよく言われている。その内容には「短い短編小説で、長さは500字から2000字ほど、結末には思わぬ展開 (twist) がくるのが特徴である。最も有名な作者は、オ・ヘンリ (O・Henry) である。」^(註1) という説明がある。実際この概念は、世界各地域・国によって、数多くの名称が使われている、たとえば、「極短篇」(Short Short Story), (Storiette), (Vignette), 「小小説」, 「微型小説」(Micro Story), (Tiny Story), 「掌の小説」, 「袖珍小説」, 「瞬間小説」(Sudden Fiction), 「ミニ小説」(Mini Fiction), などが挙げられる。以上の実態より、定着してないとはいえ、もうはや一国だけの文学現象ではなく、これまですでに世界中に広がり、作者と読者層ともに数が増え、成長し続けてきた実績がある文学ジャンルであると考えられよう。

(2) 中国における「微型小説」の成立について

さて、ここで中国における「微型小説」の成立について、その政治的、歴史的要素を含め、説明を加えたい。

上述のように、この創作方式はすでに早期において、世界的流行が見られたことは明らかである。中国においては、政治的背景により、その派生の潮流は、20世紀の70年代末ごろを待たなければならない。当時は文化大革命の終止符が四人組の崩壊によって打たれたと同時に、社会が文化的廃墟から蘇る過程において、長い間社会文化の破壊が過激な状態であったため、人々が文化的なものに対し、大変飢えていたと考えられる。精神文化被害の傷を癒すため、のちに国の政策により、文革時代停刊された文芸誌は相續いて復刊され、さらに新たな文学雑誌も発行されたのである。こうした文化活動の活発な状況が続く中、社会の経済的政策に伴い、生活のスタイルと価値観にも変化が見られ、精神面において、新たなニーズがさまざまな形で芽生えはじめ、注目されるようになったのである。当然文学雑誌などもこうした社会のニーズに応じて、概念を一新した内容のものが生まれ、発行が目白押しに続いたのである。「微型小説」のような概念も、このような時代背景において派生し、どんどん社会に受け入れられ、作者と読者と出版社の力で大きく育まれ、注目され、定着しつつある状況まで拡大されたのである。

実際中国において、20世紀始初頭、西洋思想の影響が大であった時代に、西洋的意味の「現代小説」の概念に、白話文（現代口語文）を使用する創作発想が芽生え、これまでの中国伝統的小説の

スタイルから、新たなスタイルとして、今日言われるところの「微型小説」的概念がすでに派生したと言われている。とは言え、やはり当時は、従来の長編に対する「短篇」というイメージが基であるため、概念として、あくまでも今風の「短篇小説」的範囲における曖昧な意味に過ぎないであろうと考えられる。1950年代（1958年前後）に天津「新港」などの新聞に、「小小説」のような創作作品を載せる専門コーナーが設けられていた事実がある。その後、茅盾、老舍、巴金などの文学大家により強く提唱されたこともあった。70年代に新聞「北京晩報」は「一分間小説」という名目で、特別コーナーを設置したのである、当然これも作品が短いという創作範囲を限定していることで、「微型小説」的概念がすでに派生したと考えられよう。しかし本当に正式な形で、文学雑誌において、「小小説」のような創作様式が新たなジャンルとして打ち出されたのは、ここで取り上げたい「小説界」雑誌（上海文芸出版社発行）の出現に託すことになるのである。

70年代末、文化大革命後当時、精神文化へのニーズとして、中国文学の分野では、小説が一番人気を集めるジャンルであった。1981年5月に発行された「小説界」雑誌は、当時の中国文学雑誌業界に於いて、これが小説を専門に扱う唯一の雑誌であったことで、特に重要視しなければならない。小説の専門誌として「小説界」雑誌の出現は、まさに時代に合致したものだだろう。だが、大変盛んな時期とは言え、「小説界」雑誌の主旨から、ひとつの文学雑誌として持続させるため、経営上、小説だけを扱うのは単調過ぎる、そのうえ読者のニーズに応えられないではないかと考慮された結果、「小説界」雑誌は中篇小説を中心に、長編、短篇のほかに、もうひとつのジャンルとして、「微型小説」と言う名称を初めて明確に打ち出し、雑誌に専門コーナーを設けたのである。当時「小説界」の内容について、全ての作品は現代物を中心として扱うのであるが、優れた近代、古典の作品も発表の対象としている。そして基本的に現実主義の作品を中心に扱いながら、ほかの流派の作品も歓迎している。また小説理論を取り入れることによって、小説を取り扱う雑誌において、重量感ある多様性に富んだ内容になったのである。ここで文学雑誌「小説界」を取り上げたのは、この雑誌の「微型小説」の創作スタイルを提唱したことがその後の発展に重要なきっかけになり、「微型小説」の成立に欠かせない重要な役割を果たしたと考えられるのである。この雑誌の出現が、後の現代文学社会に多大な功績と影響をもたらしたのは否定できないであろう。

その後、この創作スタイルが社会に受容され始め、「小説界」が発行した翌年の1982年鄭州百花園出版社は「小小説の世界」を発行、正式に「小小説」と言う創作スタイルを文学専門誌として上呈したのである。これ以後1984年より、経常的に小小説のような作品を頻繁に載せる新聞または雑誌の数は、400に上ると言われている。そして1985年中国新聞出版社発行の「84年中国小説年鑑」10巻（許世傑選編）の内、初めて「微型小説」の作品86編を単独に取り扱い、ひとつの巻として独立させたのである。これで形として、小説の分野として、長編、中篇、短篇と同じ土俵にあがることになり、「微型小説」の門戸が開かれたのである。

それからの発展方向と言えば、「微型小説」についての研究論集「微型小説芸術初探」（許世傑選編 河南人民出版社）が出版され、さらに1988年「微型小説」としての個人選集「太陽鳥」（劉開善著 上海文芸出版社）も出版されたのである。これを皮切りに、「微型小説」についての研究書、個人選集の出版が数多く社会に出始め、中国全地域へ広がりが見せ始めたのである。そして1992年、

上海において、「中国微型小説学会」が成立されたのである。中国の国内において、「微型小説」が事実上、小説の一ジャンルとしての成立がほぼ確定されたのではないかと考えられる。

(3) 中国以外の地域における「微型小説」の成立について

中国本土において、「小説界」雑誌が発行する以前より、中国本土以外の華語使用地域、台湾または東南アジア地域において、すでに早い時期から「微型小説」のジャンルがある程度定着された実態が見られる。この点について、本論の問題点においても大変重要なかわりがあるので、以下で触れて見たい。

1. 台湾地域について

台湾については、60年代から「小小説」が注目され始め、当時の新聞「中華日報」の主編趙振東によって、大いに「小小説」の創作が提唱され、同時に「小小説」の理論研究書「小小説の創作と鑑賞」(Maren Elwood, Write the Short Short 丁樹南訳)がこの新聞の副刊で連載されたのである。その後、「小小説」に関する論文は系列的に発表されており、有名作家数名の作品も見られるのだが、結果的に、この時期はそれほど「小小説」を創作する風潮は起こらなかったと言えるであろう。1978年「極短篇」という名称を新聞「聯合報」副刊の編集人である作家痲弦が正式に「極短篇」の専門コーナーを設け、大々的に提唱しながら、翌年には更に「極短篇」小説賞を設置、選集を出版し、この文体の創作を世間に注目させる努力をしたのである。

80年代に入ると、個人作家の極短篇集が見られたとは言え、やはり成長期に過ぎないと考えられる。80年代後半に入り、やっと盛んな創作風潮が沸き起こったのである。ここで特に重要視しなければならないのは、1987年新聞「中華日報」が主催する「中華文学賞」のなかに、「小小説創作賞」という項目が特別に設けられたことであろう。それに続いて、各出版社も頻繁に個人作家の小説選集を出版しはじめたのである。この間、社会においては作者たちがこの小説のジャンルについて知識面において吸収することができ、もっと創作の風潮を高めるため、各出版社より外国の小説作品が相次ぎ出版され、例えば1986年円神出版社から「日本「掌中小説選」(李永熾訳)、1988年世界極短篇「瞬間集」(楊月蓀訳)、1988年アメリカ極短篇「刹那集」(阮仁華訳)、1985年宇宙光出版社からドイツ小小説「愛の人生」(王真心訳)、1989年方智出版社から外国名家極短篇3冊(曹又芳編)など、多くの外国作品が紹介されたのである。90年代以後になれば、この創作方式の名称は幾通りがあるとはいえ、このジャンルの文体と創作について、文学界だけに留まらず、社会一般においてもほぼ完全に受け入れられ、それは作品の数とそれに関する出版社の多さからも知られ、台湾文学界において定着したと考えても過言ではないであろう。

2. 東南アジア・他の地域について

東南アジアにおいて、華人が社会的に重要な位置を占めていることはよく知られている。そしてこれらの地域で、中国系の人々には、幼稚園から大学までの学校があり、華語教育が整えられているところが多く存在するのが現状である。よって、中国系の人々の華語レベルは、書き読みだけに

留まらず、文学的創作もできるのは、ごく一般的なことである。同時にこの社会背景は、これらの地域における華語創作の基盤を固く築き上げた起因であろう。

実は、1992年上海で「中国微型小説学会」が成立された時と同じ年に、もう一つ重要なことを注目しなければならない。それは「中国微型小説学会」会長江曾培が主編した「世界華文微型小説大成」(上海文芸出版社)が出版されたのである。この書名の通り、「世界」と名乗ったのは、中国以外の地域・国出身の作者の作品が集められたのである。作品に関しては、中国大陸出身の作品は八割に占められている、そのほかは中国以外地域の作家の作品が二割ほど、中でも台湾出身の作家が最も多く、残りの約一割は、シンガポール、マレーシア、マカオ、フェリピン、アメリカ、香港となっている。

さて、作品が集められていることは、当然それより以前にそれぞれの地域において、創作活動が行われていることを示していると考えられよう。実際80年代以前より、シンガポール発行の「南洋商報」、「星洲日報」の副刊には、すでに微型小説を載せ始めている。そして80年代中期、香港、シンガポールにおいて、それぞれ小小説の選集が出版されている。たとえば「香港小小説」(1986年)、「シンガポール微型小説選」(1989年)がある。更に1992年7月「シンガポール作家協会」より世界中の華文微型小説の創作作品を全て取り扱う対象となる文学雑誌「微型小説季刊」が創刊されたのである。そしてこの雑誌の内容については、小説創作の作品だけに留まらず、微型小説に関する理論も取り入れられているのである。この雑誌の創刊は、華文微型小説の発展にとって、重要な原動力になったと考えられよう。

1991年、タイにおいても第一冊目の微型小説選集が出版されている。しかも雑誌書刊の出版だけではなく、「シンガポール作家協会」は雑誌の発行に続き、1994年「第一回世界華文微型小説研究学会」を開いている。さらに2年後の1996年、タイにおいて「第二回世界華文微型小説研究学会」が開催されたのである。この2回の大会には作家、研究者の多数が出席し、参加者の地域から見ると、およそ十数カ国にのぼり、なかには中国国内からの参加者も多く見られたのである。そして第2回の会議において、次の大会の開催地をマレーシアに決定したのである。このような大会の開催は、華文微型小説の成立に大きな働きかけと同時に、華文微型小説がそれぞれの地域における定着と発展の基礎を固める重要な役割を果たしたことは、相違ないであろう。この実態について、本論で特に注目したいのは、「世界」を視野に入れ、それを基盤に「華文微型小説」を発展させる点である。

二. 「微型小説」成立の問題点について

これまで述べてきた内容は、中国国内または国外の地域において、「微型小説」とその成立が歩んできた実態である。決して安易な道のりとは言えないが、数多くの作者が次から次に創作活動に参入し、中国国内だけでも、この分野の出版から研究まで、発展状況がますます上昇し続けているのである。しかしこの実態と裏腹に、現在「微型小説」の最も大きな問題点は、このジャンルの中国現代文学における位置付けというものが、それが完全に確定されていないという現状である。

微型小説の創作と研究に関して、多くの人々の努力によって、さまざまな実績が挙げられている。作品と研究の出版市場も活気を見せてはいるのだが、しかし文学的地位が定められた時はじめて文学のジャンルとして成立したと言えるのである。実は微型小説が正式な文学ジャンルとして定位されない理由には微型小説自体にあるのも事実である。成立する過程において、多くの問題点を抱え、解決するには克服し難い部分も存在するのである。この章はこの点について検討してみたい。

(1) 名称の問題

そもそも微型小説の発展は、世界において、異なる時期で、異なる地域において、各自で試験的に成長しながら進展をし続けたのである。現代小説の分野からその概念が分身し始めたのは、西洋文学が起源であると考えられよう。その点については、数多くの論議がなされており、ここではその点について、省略したいと考える。本論はすでに中国文学界において、かたちとして存在する「微型小説」について、考えることにする。

「微型小説」のについて、最大の問題点は、その創作様式に対して、文学のジャンルとしての名称が統一されていないことである。統一されていないため、文学史において、その定位が曖昧になり、存在価値が定め難い状況に陥るのである。多くの作品が創作され、優れた評価が得られていたにもかかわらず、現代文学の一ジャンルとして、見なされることは困難であろう。

そもそもこの名称問題の起因は、その創作様式が派生する背景に由来するのである。名称が異なるのは、それぞれの派生する地域が別であり、作品が発表する場の現実的ニーズも相違性が見られるためである。当然この文学様式概念と創作は、各地域において一斉に始まったわけではない。そして中国以外の地域が中国国内よりも時期的に派生が早いことも事実である。上述した、「世界華文微型小説大成」が出版される時点で、この創作様式に対して、すでに数多くの名称が同時に存在していたのである。例えば「小小説」、「精短小説」、「超短篇小説」、「極短篇小説」、「微信息小説」、「一分鐘小説」、「一袋煙小説」、「袖珍小説」、「焦点小説」、「瞳孔小説」、「拇指小説」、「ミニ小説」などが挙げられる。新たな創作スタイルが芽生えた際、それに対する命名が多発する現象は、極一般的過程であると考えられる。がその問題の解決と言え、なかなかめどがたたないのが実態である。その理由について、この創作様式には、派生する地域を問わず、全ての創作が華語圏によって行われるため、裏背景として、歴史、政治などの要素も名称を多く産出させた起因であると考えられよう。中国国内において、市場経済開放政策が明確に行われるまで、長年の政治的閉鎖と混乱により、この創作様式にとって、国外で活発に進展しているにもかかわらず、華語の本家として、方向性を明確にし、大きく育む時間と空間が奪われ、発展が遅れてしまい、その結果として名称の乱立になったのではないかと考えられる。

名称の乱立現象は、上述したように、それぞれ派生する地域における創作理論の由緒が相違するだけではない、創作する側も創作のジャンルの正当性を求める自覚がなく、さらにジャンルとしての名前の一致に対する追究意識がなかった現実も重要な原因であろう。しかし時代の変化とともに、作品の読者層が年々増加し、出版市場も広範囲において活発になり、作品の数が増加し、更に作品

が学校の教材に取り入れられ、研究対象になる現実のなかで、名称の統一問題は、ある意味では、避けて通れない状況にあったのである。その後、中国国内の多数の作家と広大な読者市場を持ちながら、世界華語文学の中心として、率いる舵取りの役割がより一層重要になったのである。

1990年代に入ると、この文学様式名称の使用について、ある程度の方向性がみられるようになり、一般的に多くの名称がかなり絞られ、統一までには行かないのだが、「微型小説」という名称が現代文学界において、使用される頻度が高くなりつつある。反面ほかの名称が次第に使われなくなり、消え去る傾向が顕著に現れたのである。

なぜこの時期から以上のような実態が現れたのかについては、前述した中国国内の政治、歴史的な理由が直接関係すると言えよう。この時期より、中国国内における市場開放の政策が打ち出され、国民全体における精神生活の質を高めるため、ニーズが多様化され始めたのである。当然文学に対しても同様な需要が見られ、市場がそれまでより大きく広がり、活気を見せたのである。文学に対する関心が高くなるにつれ、次のようなことも当然のように生じたのであろう。実は当時読者からこの創作分野の名称について、統一して欲しいという要望が出た実例があったことも事実である。^(注2)

文学の分野において、創作の作品数が増えるとともに、創作に関する理論的研究書も相次ぎ出版され、そして「微型小説」の名称を使ったもの、たとえば「微型小説の理論と技巧」(劉海濤1990)、「微型小説写作技巧」(袁昌文1988)、「微型小説創作論」(李麗芳1990)、「微型小説創作技巧」(陳順宣1990)、「微型小説芸術初探」(許世傑1987)など多くが見られるようになったのである。作品集も中国の国内外を問わず、微型小説の名称がかなりの数で使われていることが明らかである。冒頭に触れた「世界華文微型小説大成」の編集者曾培江がその序文に、当時の流れの実態を受け、この小説集の名称を付けたのは、「微型小説」の名称を正式の文学ジャンル名として、定名して欲しいという思いがあったと自ら示唆したのである。ではなぜ「微型小説」の名称が適切だとしたのかを検討するには、創作の文体形式にも触れなければならないため、次の節で考えることにしたい。

(2) 文体の問題

文体の問題については、なぜ名称の問題と関係があるのか? 名称がその創作分類の形式をいかに適切に表現できるかは、文体様式自体をまず決める必要があるであろう。よって文学ジャンルとして成立するには、両者は深く関わり、互いに欠かせない重要な決め手を持ち合せているのである。この点に関して、「世界華文微型小説大成」の副編集長凌煥新が微型小説の名称の適切性について、およそ次のように分析している。ここでは、その内容に触れながら説明を加えたい。

その1、「微型小説」という名称はほかの呼び方より正確かつ概括的にこれらの創作様式の特徴を把握し、表現できるのである。「極短篇」と「超短篇」はやはり短篇の一支に過ぎないという印象を与えるため、短篇との境界線を明確に切り離せることが出来ない。「精短小説」では個性不明である。「一分間小説」、「一袋煙小説」は読者の作品の読む時間を重点的に強調しているため、創作の概念が曖昧になってしまう。「微信息小説」は創作範囲が狭すぎる。「袖珍小説」、「瞳孔小説」、「焦点小説」、「拇指小説」、「ミニ小説」などはこの創作の様式のある一部分の特徴だけを強調され

る嫌いがあって、全面的に文体と創作理念を概括することは出来ない。「小小説」は使用する歴史が長く、50年代から文学大家の老舎らが提唱した事実もある。しかし当初のイメージから考えると、まだまだ明確に短篇小説と切り離さずに、ただ篇幅が短篇より小さい規模のものと言う漠然とした定位であった。50年代「小小説」の名作として評価された二つの作品「電鈴を踏む」(万国儒)、「社長の髪」(申躍中)^(注3)を検討すると、当時の小説の創作論理が現在の作品の創作概念と相違性が見られる。必ずしもこの二作品のように、ドキュメンタリー的な創作でなければならない理念は明らかである。50、60年代において、小小説がかなり突出的文学現象であったことは相違ないのだが、そのままの概念を現在の創作様式に当てはめるのは、かなりのずれを生じさせるのも想定できるであろう。実は当時の多くの作品は字数が定めにくく、字数の多い作品も多く存在し、当然形から考えて、普通の短篇小説に分類すべき作品も少なくないのは事実である。

その2について、凌氏は「微型小説」の名称が時代的特色を代表できると強調している。現在社会は50年代と比べ、目に見えるほどの大きな変貌が見られる。社会の役割分担が細かく変貌し、科学技術も多方面において、精密化され、世界が微視的且つ密度の高い方向へと発展しているなか、「微型」は言葉としても新語であり、時代にあった名称で統一すれば、そのイメージは作家が精神的な面において、小説の創作に対して、その独自性が体感でき、50年代から派生した「小小説」の名称より、古い理念と枠に束縛されずに、今の時代に適した方向性を新たに発揮し得るではないかと思われる。

その3については、凌氏はその命名の方法から、ほかの名称より断然合理的に見えて、更にロジック的であると考えるのである。現代文学として小説のジャンルの「長編」、「中篇」、「短篇」と同じように、二つの音節で並べる「微型」は、呼び方としてバランスがよく、違和感がないとっている。この点に関しては、理念的に考慮するよりも、中国語の発音が持つ要素が大変重要なポイントになるであろう。

以上の三要素のほかに、結局名称に関連する形の短、小は最も重要なカギであると考えられる。短、小という形に従うために、当然重要視しなければならないのは作品の字数であろう。微型小説の成立条件は、普通の短篇小説と明確にその相違性を示すことであり、よって字数に関しては、ある一定の規定が必要だと考えるべきであろう。

字数問題については、この創作分野が成立するにあたって、形を決める重要なカギである。短篇小説と明らかに相違点を示さない限り、独立した分野として成立できえない。現在の実態として、2千字が一つの目安になっているとは言え、正式に成立していない以上、明確な規定にはならないであろう。解決法として、現実的に、それぞれの出版側から作品集などを編集するに当たって、作品の字数を各自のルールにしたがって、選定条件に加える形で行われている。そして各関係者、研究部門などにおいて、この問題について議論が重ねられてきたが、そのなかではやはり上限として、2千字までが最も有力な基準であると考えられているようである。文字の下限は制約しないが、しかしあくまでも小説として成立できるものを作品として見なすのであり、内容として単なる文字の遊びに過ぎないのであれば、作品として認めることが出来ないと考える。

この問題に関して、「字数」が現代文学における正式なポジションをえるための重要な決めてである以上、2千字までの条件は独自性を示す最も合理的数字であるとは、これまで多くの論議及び実質的に行いのなかにおいて、すでにある程度の黙認と実行が行われ、定着しつつあるのである。よって、この問題の方向性として、確定する可能性は高いではないかと考えられよう。

(3) 作品の文学表現と芸術性の問題

前節で、作品の字数問題を取り上げたが、字数を決めるのは一つの形を整えるためであり、作品の芸術性と表現とは、別問題であると考えられる。そもそもこの創作様式が派生した当初から、この部分の理念を追究するため、最も多くの議論が重ねられたのである。字数が少ないなかで、内容に芸術性、文学性がいかに表現されているかが作品評価の鍵である。ここで議論の問題点において、注目したいのは創作文体の性格とその表現の意外性についてである。

まず文体の性格について触れて見たい。これまでこのような創作の文体に対して、エッセイ体、詩体、小説体などさまざまな創作理念が持ち出された。作家たちも創作において、時代の流れに従って、さまざまな方向を試し確認しながら行ってきたのである。一つの創作ジャンルが成熟していない時期では、多くの試行錯誤を経験する必要がある、その過程を通じて、定着すべき方向を見出すのが当然の成り行きであろう。派生当初から現在まで、時代的に作品を見れば、ただの語り風のエッセイであったり、文字の遊びのような形が現れたり、いかに普通ではないことを誇示するような作品は、時代の流れとともに起伏していたのが実際の状況だった。がやはり小説として考える以上は、まず普通の小説に基づいた創作理念を守るべきだと考える。当然小説と言う文体様式をいかなる方法で表現するのかは、小説と言う創作範囲において、時代とともに歩みつづければよいのではないかと思われる。要するに、時代は常に変化が伴うのである。小説と言うジャンルは現代文学としてそれなりに自己の固い基盤を持っている。その基盤にそって進展すれば、この新しい文学ジャンル「微型小説」としては、現代文学における位置付けが、確実に成立しかつ維持できると考えられよう。次はもっとも「微型小説」創作の芸術性として、議論が多かった「結末に意外性をもたらず」点について考えてみたい。

微型小説とは、短い創作が前提であるので、浅薄化されないため、ある程度の工夫が要求されるのは当然であろう。しかしこの分野においてどうしても結末の意外性と結びつくこだわりが見られるようである。その作風を持って、作品の格調と表現の優劣を評価の基準さえ考えられていたのである。この理念の由緒は、「小小説」または「微型小説」が派生する当初、世界の有名作家 O・Henry の作風があまりにも強く影響を与えたためであろう。確かに字数が少ないので、内容に転折を取り入れなければ、平板無味だろうと考えたのである。中国作家協会創研部が出版した「微型小説佳作選集」(2003)の序文に、この結末の意外性を持って、「小小説」と「微型小説」の創作手法の違いとして捉えている。しかしこのように創作技巧を限定する意識は、この分野の創作において、必ずしもプラスにならないのではないかと考える。現に数多くの作品がすでに市場に出回り、専業作家も出始めている、この分野において、創作のネックになっているのは字数で、作品が短いことが前

提条件である。そこで、作家として成り立つには、作品の数をある程度こなせなければいけないであろう。この点に関して次の文学賞を論ずる部分にも関連するのだが、作者が多く創作するためには、作風を一貫して変えないのもいいかもしれないが、いろいろな可能性を追究することもあって当然であろう。

大体「微型小説」の内容は字数に関係すると思われるが、現に作品の多くは、偶発性の出来事、または映画のワンシーンのような描写手法が多く見られる、よって、結末の大逆転は優れた表現法として、現に作品評価の絶対的基準として考えられていることも少なくない。その点に対して、実際創作側からも異議が訴えられている。そもそも O・Henry の作品はほとんどが短編である。彼の作風は確かに優れたところはあるとは言え、その手法は世界の短編小説の伝承モデルになっていないのも事実である。ゆえに、これから「微型小説」などの創作に対して、可能性は無限であるし、唯一の評価基準に定めるのは、限界があり適切でないと考える。

(4) 「文学賞」の定位問題

第3節において、作品の数のことを触れたが、作品数が問題として取り上げる必要があるのかは、ここで取り上げる文学賞の問題と深く関連しているためである。

微型小説の創作様式がうまれてすでに20年の歴史があり、長く続けられた事実から、作品と作者の数が徐々に増え続け、特に近年において、世界中の華語圏との連携も盛んに行われたことによって、読者層と市場も世界へと広がり始めている。作品数が大量に増え、期刊雑誌も多く出回り、インターネットを通じて、「微型小説」、「小小説」に関する情報が世界へどんどん発信され、大いに市場開拓に役に立つであろう。読者市場が拡大されるにつれ、出版事業が隆盛をみるなかで、この創作分野における文学賞を設置すべきではないかとの考えがあらわれたのである。だが、現在の状況から考えれば、正式な権威ある文学賞として成立するには、多大な困難があるではないかと思われる。その最大の壁は、「微型小説」のような創作分野が、まだ中国現代文学の一ジャンルとして、文学界から正式に承認されていないことである。

実際これまでの中国国内の文学界において、微型小説の作品を評価するための権威ある文学賞を設置すべきかどうかについては、文学界の有力者の間でも賛否両論があり、さまざまな観点と指摘がなされた。賛成の理由については、微型小説の群衆意識、市場意識、思想と芸術性において、優れた表現力を持っている点を高く評価している。さらに今後この分野がより一層発展しうるため、励ましの意味で設置してよいではないかという意見もあった。反対の理由については、本論がこれまで論じて来た文学における創作分野の名称統一問題、作品の形に関する字数の問題、創作文体と芸術表現の問題など、微型小説自体が抱えている問題が未解決状況にある現実に対して、指摘されることが多かったのである。作品数こそ多いが、作品に対する評価基準が定かでない限り、一つの文学ジャンルとして、まだ成熟したとは考えにくいと中国作家協会関係者からも疑問を投げかけられたのである。さらに微型小説（小小説）の特色としてよく強調されるその庶民性についても、逆に文学の方向性を局限され、懸念されることもあった。

だがそういう障害をよそに、2004年雑誌「小小説選刊」、「百花園」、「小小説クラブ」、鄭州小小説学会が共同で「中国小小説金雀賞」を設立し、2005年にはすでに第2回目の表彰を行ったのである。この賞の設立に当たって、問題点は多いとされる中で、賞の名称と審査の基準が最も議論的になったのである。結果、賞の名前のモチーフとして、雀を選んだのは、小さいと言うイメージと中国語のことわざに「麻雀虽小，五臟俱全」（雀は体は小さいが、五臟を俱全である）—規模は小さいが、みなそろっている—ということを創作理念、文体様式など、小、巧、美の要素と一致し、整えていることを強調しているのである。又この賞の特徴として、評選範囲は全国的であり、現存の新聞、雑誌などにおける同性質の選考活動に影響されないと宣言している。

文学賞として成立するには、当然作品の評価基準を決める必要がある。この点に関して、設置側はなるべく現存のほかの権威ある小説賞の基準に格差が生じないレベルで扱いたいため、小小説の形の特徴から、作品の字数が少ないことを考慮し、作家の著作を評価の対象にする案もあったが、しかしその場合、ほかの文学賞とのバランスが取れなくなるので、評価方法を次のように変えたのである。その内容は、一つだけの作品を対象にするのは单薄過ぎる懸念があることから、審査方法として、一人の作家は、10篇の作品を持って、審査の対象としなければならないことを決めたのである。10篇という数字には、ほかの全国性文学大賞小説分野長篇、中篇短篇における作品の分量的バランスを取るためである。偶然にひとつの作品だけが優れたのではなく、一度に10篇も集めれば、総合的創作実力として、ある程度見出せるのではないかという考えである。この賞の表彰は、第2回より以後、現在は2年に一度行うことを新たに決めている。

微型小説に対しての評価として、権威ある大賞が設置されるには、まだ時間かかると思われるが、しかし創作と読者と市場については、これからもますます氣勢があがり発展することは相違ないであろう。その理由は次章で触れたい。

三．「世界華文微型小説」の存在意義について

「微型小説」の中国国内における進展は、現時点ではかなり盛んになっている。その裏背景には、この創作分野は華語文学の一ジャンルとして、「世界」という市場と結びついているからである。上述の内容にもすでに説明したように、そもそも「微型小説」は中国国内より派生したわけではなく、地域としては台湾が最も早く概念と創作を実質的に取り入れたのである。そこからの発信によって、国外の地域、特に東南アジアなど華語教育が現地社会において、完備された制度があり、その華語が国内と同様なレベルを持ち、華語に関する情報伝達の環境が整えられているところから、かなりの創作活動と作品数を保っているのである。さらにこの分野に関する出版業界の実績を見れば、中国国内の現状に負けないほどの隆盛振りが見られるのである。また学術的研究分野として、これまですでに2回「世界華文微型小説研究学会」が開催され、それからも継続されつつ方向が決められている。そして学会だけに限らず、「微型小説」現象は、現実に世界華語作家の交流、対話と切磋の場になっているといわれている。当然この学会の参加者には、中国以外の地域に局限されているわけではなく、国内の研究者たちも積極的に参加し、取り込んでいることは事実である。この現

状に対して、特に注目したいのは、「微型小説」の創作が世界の華語社会において、多大な役割を果たしている点である。

これまで華語微型小説の展開において、世界の中国語メディアのネットワークと深く関わっていることは、上述したように明らかな事実である。その中国語メディアのネットワークが近年新たな展開へと向かっていることは、今後の「微型小説」の進展にも何らかの影響をもたらすであろう。2001年9月第一回世界中国語メディアフォーラムが中国南京で開かれた。主催者の中国新聞社は「海外におけるメディア運営の経験を交わし、海外の中国語メディアが直面しているチャンスとチャレンジを分析する。友情を求め、協力について話し合う。これらの活動を通じて、世界中の中国語メディアの更なる発展を推進しようとする。」と開催目的を示したのである。大会には世界各地からの中国語新聞、雑誌、ラジオ局、テレビ局、ウェブサイトなどの責任者150人以上が集まり、さらに250人を超える中国国内のメディア関係者もフォーラムに参加したのである。世界中の華人が情報を共有する中国語メディアネットワークの構築は、時代の要請でもあるとの指摘があった。^(註4)中国語のメディアネットワークがこれまでの華人社会において、経済的働きを伴い、政治社会、文化交流の促進にも大変重要な原動力になったのである。かつて、1929年「星洲日報」が創刊され、後にいくつかの「星」の字が付く系列の華人社会を対象とする新聞も相次ぎ発行されたのである。その他に台湾「聯合報」の系列である華人新聞も発行され、なかにもアメリカで発行された「世界日報」は、すでにアメリカで発行される日刊部数の最も多い新聞の一つになっている。中国の新聞には文学の創作作品を載せる習慣がある。よって、「微型小説」も長い間、「新聞」という発表の場をもって、育まれ大きく成長したのである。

1990年代に入ってから、中国大陸出身の移民、移住者が世界各地においてその人数を急増させている。「星島日報」^(註6)、「世界日報」のような香港、台湾との繋がりが強い中国語のメディアも中国大陸に関係する情報を大幅に増やしている。この現象は、政治の面での敵対的な障害は、グローバルな連携力によって、プラス方向に動かされる基盤になるであろう。そして文学界においても同様に起こりうると考えられる。現に微型小説が華語社会における広がりの実態からも、その気配と勢いが読み取れるであろう。情報源である華語新聞は、これからの華人社会において、中国語のメディアネットワークがますます緊密に連携を強めることは予想されるであろう。それに伴い、「微型小説」が文学と言う精神的繋がりの原動力として、その存在意義は中国語のメディアネットワークが華人社会における重要な存在意義と重層的に位置付けされることは、過言ではないと考えられよう。

結 び

「微型小説」の中国現代文学における位置付けは、問題点が未解決のため、まだ正式に定位されないのが現状であるが、しかし現実には、この分野の創作は、すでに世界と言う広大な地盤を保有し、独自の作家層と読者層を確保している。さらに学術的研究も増えている状況がみられ、将来「微型小説」の存在価値を高める効果にもつながるであろう。

中国語メディアのネットワークがグローバル化に伴い、世界を視野に入れた「華語文学」の普及

もより早く拍車をかけられ、更に華人社会以外のところまで進展を早めるであろう。現に日本においても、中国語の教材として使われている事実があり、研究対象にもなっているのである。華語社会において、厚い作者層、読者層の確立が文学界に有力な存在として、或いは「微型小説」の存在感自体も拡大させるであろう。これだけ大きな市場に取り上げられるようになれば、作品の質をレベルアップさせることにおいて、最大のチャンスであり、必要不可欠な条件にもなるだろう。本論は「微型小説」の形成と定位について、説明と問題点を検討してきたが、これからは、特に「微型小説」について、異なる地域の多くの作品を具体的に取り上げ、新たな視点から考察したいと考えている。

注 釈

1. 「西洋文学辞典」顔元叔著 1991 台湾正中書局を参照。
2. 当時において、新聞「文学報」に読者からこの創作様式の文学は、ここまで発展したのに、まだ名称が決まっていないのはおかしいという批判とともに、早く名称について検討し、決めて欲しいという内容の読者からの投書があった。
3. この2作品ともに「世界華文微型小説大成」(江曾培主編)に収録されている。
4. 「中国新聞社」は中国語名であり、「新聞」はニュースの意味である、略称「中新社」。主に台湾、香港、マカオ及び海外の中国メディア向けに配信サービスを提供する通信社である。「新華社」と並んで中国2大通信社である。
5. 香港で発行されるニュース週刊誌「亞洲週刊の編集長」邱立本氏が「グローバル華人メディアの魅惑」における発言である。
6. 「星島日報」は1938年香港で創刊され、1960年代からニューヨーク、サンフランシスコ、ロサンゼルス、トロント、バンクーバー、アルバート、ロンドン、シドニー、オークランドなど華人が多くすむ地域に進出し、華語ネットワークの星島グループを作り上げたのである。

主な参考資料

- 「世界華文微型小説大成」 江曾培主編 1992 上海文芸出版社
「極短篇の理論と創作」 張春榮著 1999 爾雅出版社
「微型小説2003佳作」 楊曉敏 郭 寇云峰編 漓江出版 2004
「首屆中国小小説金雀賞獲獎作品集」 百花園雜誌社選編 漓江出版2004
「中国語メディアのネットワーク化と新たな展開」 劉雪雁 東京大學社会情報研究所 情報メディア研究資料センターニュース第14号 2002年3月
「極短篇美学」 瘴弦 他著 爾雅出版 1992